

友人関係の単一 - 多重送信性と 都市的環境への適応

—— 都市部大学生を対象として ——¹⁾

宮崎 弦太・田端 拓哉・池上 知子

◆要旨

本研究の目的は、どのような友人関係を築くことが都市的環境への移動者の心理的適応を高めるのかを明らかにすることである。所属欲求仮説と都市社会学の知見から、都市的環境への移動者において、多重送信的な友人関係よりも単一送信的な友人関係を築いている者は、友人たちからより有用な資源を得ることができ、そのため心理的適応が高まると予測された。この予測を検証するため、関西圏の都市部の大学に通学する大学生675名に対して質問紙調査を行った。参加者は出身地により移動者と非移動者に分類された。質問紙では、友人関係の単一 - 多重送信性と主観的幸福感が測定された。予測どおり、質問紙調査の結果から、単一送信的な友人関係が築かれているほど主観的幸福感が高いこと、そして、この関係は移動者にも認められ、非移動者では認められないことが明らかになった。これらの結果は、都市的環境への移動者がその新たな環境に適応するうえで、単一送信的な友人関係を構築することが特に重要であることを示唆している。

キーワード： 都市的環境, 心理的適応, 単一送信的な関係, 多重送信的な関係, 移動者

(2009年9月18日論文受理, 2009年11月6日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

問題

都市は、医療、教育、娯楽などのサービスや施設の多様性、また、それに伴って生まれる多様な職業機会によって、多くの人々を外部の地域から引き寄せる。都市的環境の1つの特徴は、その環境への流入者の多さにある (Fischer, 1976 松本・前田訳, 1996)。一方、これまでの心理学的研究から、新たな環境への移動に伴って心理的不適応が生じやすくなることが明らかになっている (レビューとしては、Van Tilburg, Vingerhoets & Van Heck, 1996を参照)。したがって、都市的環境への移動者が抱えやすい心理的問題に対して、どのように対処することが適応につながるのかを明らかにすることは、都市が内包する問題の解決に向けて1つの有効なアプローチといえるであろう。本研究は、居住地の移動によって生じる心理的不適応を既存の対人ネットワークからの分離という点から捉え (Baumeister & Leary, 1995; Watt & Badger, 2009), 新たな環境でどのような対人関係を築くことが移動者の心理的適応を高めるのかを検討する。

新たな環境への移動に伴う心理的不適応

新たな環境への移動と心理的不適応との関係を検討した心理学的研究として、ホームシック (homesickness) に関する研究が挙げられる。ホームシックとは、慣れ親しんだ居住環境を離れて新たな環境に移動したときに経験される心理的な苦痛や悩み (distress) である (e.g., 両親のことを恋しく思う、孤独を感じる - Strobe, Van Viliet, Hewstone, & Willis, 2002; Van Tilburg et al., 1996)。これまでの研究から、ホームシックを強く経験している人は、そうでない人よりも、不安や抑うつなどが高く、心理的な不適応状態にあることが明らかになっている (Fisher & Hood, 1987, 1988; Strobe et al., 2002; Van Tilburg, Vingerhoets, Van Heck, & Kirschbaum, 1999)。

ではなぜ、新たな環境に移動することによってこのような心理的不適応が生じるのだろうか。Watt and Badger (2009) は、人間が持つ所属欲求 (need to belong - Baumeister & Leary, 1995) の点からその説明を試みている。所属欲求は、他者と安定した肯定的な

関係を構築・維持しようとする欲求であり、他者との関係性を通して自己の生存と繁殖に必要な資源を得てきた人間がその進化の過程で獲得した基本的欲求と考えられている (Baumeister & Leary, 1995)。そして、他者とのつながりを失い、所属欲求が阻害された場合、それは生存への脅威となることから、生理・感情・認知・行動レベルで様々なストレス反応が生じ、その状態が長期間続くと、身体的および精神的な健康が損なわれるとされている (Baumeister & Leary, 1995; Cacioppo & Patrick, 2008)。Watt and Badger (2009) はこの議論を適用し、ホームシックを地理的移動に伴う既存の対人ネットワークからの分離によって所属欲求が脅かされたときのストレス反応と位置づけた。そして、大学の留学生の中で所属欲求が恒常的に強い人 (i.e., 所属欲求が脅かされやすい人) ほど、ホームシックを経験しやすいこと、また、大学入学時に居住地を移動した人に対して、所属欲求を喚起する実験操作を行った場合、そのような操作を行わなかった場合よりも、ホームシックが強まることを明らかにし、上述の議論の妥当性を検証している (Watt & Badger, 2009)。

以上の研究から、新たな環境への移動によって生じる心理的不適応の1つの原因として、以前の居住環境との地理的距離の増大とそれに伴う対面接触の減少によって、既存の対人ネットワークの維持が困難になり (松本, 2005)、その結果、所属欲求が阻害されることが挙げられる。そのため、移動者が新たな環境で心理的適応を維持するうえで、所属欲求を充足するような対人関係を再形成することが重要となるだろう。事実、Watt and Badger (2009) は、新たな環境で自分が受容されていると感じている人ほど、ホームシックの経験が少ないことを示している。しかしこの研究では、具体的にどのような関係を築くことが、心理的適応を高めるのかは検討されておらず、新たな環境で築かれる対人関係と移動者の心理的適応との関連は十分に明らかになっていない。本研究では、人は他者との関係性を通じて自己にとって必要な資源を獲得してきたため、他者との関係を希求する欲求が生じたとするBaumeister and Leary (1995) の進化論的議論に基づき、新たな環境への移動に伴う所属欲求の阻害、そしてその回復という過程 (Watt & Badger, 2009) を、関係性を通じた資源獲得という点から捉える。つまり、環境の移動によってそれまで資源の提供源であった対人関係を失った場合、自己にとって必要な資源を提供してくれる代替関係を新たな環境で形成することが、個人の心理的適応を高めるうえで重要となるであろうという仮説を立て検討する。

友人関係の単一 - 多重送信性と心理的適応

ところで、都市社会学の分野では、友人関係の様態が居住環境の都鄙性によって異なることが知られている (e.g., Fischer, 1982 松本・前田訳, 2002; 松本, 2005; 大谷, 1995a, b, 2008)。具体的には、都市での友人関係は、役割や活動に応じて異なる友人と選択的に付き合うという単一送信的 (uniplex) な関係になりやすく、一方、村落での友人関係は、特定の友人が様々な役割を担い、また多くの活動を共有するという多重送信的 (multiplex) な関係になりやすい (大谷, 1995a, b, 2008)。

このような友人関係の都鄙差が生まれる原因について、宮崎・金児 (2007) は、それぞれの環境での適応方略の違いという観点から考察している。つまり、都市のように多様な友人関係の構築が可能で、その代替選択肢が豊富に存在する環境では、専門的な役割を果たす様々な友人と関係を築くことが、自己にとってより有用な資源を獲得できる可能性を生み、適応的な対人関係方略となる。一方、村落のように利用可能な友人の代替選択肢が限定された環境では、複数の役割を果たす友人との関係を維持することが、必要な資源を獲得するうえで適応的な方略である。このような資源獲得における適応方略の違いから、都市では単一送信的な友人関係、村落では多重送信的な友人関係が優勢となりやすいと考えられる。これは、他者との関係性を自己にとって必要な資源の獲得方略と捉えたとき、社会環境の性質がその方略の適応性を規定するとする山岸 (1998) の主張とも符合する。実際、宮崎・金児 (2007) が行った調査では、都市に居住する人は、友人数が多く、人間関係への満足感を高めていたのに対して、村落に居住する人では、両者の間にそのような関連は認められていない。友人数が多くなるほど、個々の友人と複数の役割や活動を共有することが少なくなること (Fischer, 1982 松本・前田訳, 2002) を考えると、この結果は、都市的環境において単一送信的な友人関係を實現している人は、対人関係における適応感が高いことを示唆している。

以上の議論から、都市的環境に居住する者は、その環境での適応方略と合致する単一送信的な友人関係を形成している人ほど、心理的適応感が高いと考えられる。さらに、友人関係の単一送信性と心理的適応感との関係は、都市圏あるいは都市への通学・通勤圏内にもともと居住していた者よりも、その環境に移動してきた者において顕著に表れると考えられる。なぜなら、既存の対人ネットワークから分離した移動者にとって、その代替関係を新たな環境で形成することが特に重要な課題となり (Van Tilburg et al., 1996; Watt & Badger, 2009)、その達成の如何が個人の心理的適応全般を大きく左右すると考えられるからである。

本研究の概要と予測

本研究では、関西圏の都市部（大阪府大阪市、吹田市、大東市）の大学生を対象とした質問紙調査によって、友人関係の単一 - 多重送信性が都市的環境への移動者の心理的適応に及ぼす影響を検討する。

なお、本研究では、関西圏の都市部にある大学に通学する大学生の中で、関西圏外の出身者を移動者と位置づける。これは、調査を行った大学への通学範囲を考えると、関西圏外の出身者は、大学入学以前にそれまで居住していた地域から現在の居住地に移動してきた可能性が高いからである。

本研究で検証する予測は以下のとおりである。

予測 1

都市部の大学に通学する大学生は、友人関係の単一送信性が強いほど心理的適応感が高い。

予測 2

友人関係の単一送信性が強いほど、心理的適応感が高いという関係は、関西圏内出身の学生より、関西圏外出身の学生（都市的環境への移動者）において顕著となる。

方法

調査参加者

大阪府下（大阪市、吹田市、大東市）にある2つの私立大学と1つの公立大学の大学生675名（男性328名、女性345名、不明2名）が調査に参加した。平均年齢は18.91歳（ $SD = 1.22$ ）であった。その中で、回答に不備が認められた14名の参加者のデータは、以下の分析から除外した（ $N = 661$ 、男性320名、女性339名、不明2名）。

手続き

大学の講義時間の一部を利用して質問紙調査を行った。参加者には、まずフェイスシートで、学年、年齢、性別、出身地（1. 大阪市内、2. 大阪府内、3. その他、4. 日本以外）を記入してもらった。出身地でその他を選択した参加者には、具体的な都道府県名の記入を求めた。その後、友人関係の単一 - 多重送信性と心理的適応の指標である主観的幸福感（subjective well-being）を測定する尺度に回答してもらった（各尺度の詳細については後述）。なお、この質問紙調査では、愛着傾向、拒絶のサインへの感受性、アイデンティティの多様性、レジリエンス（resilience）も測定しているが、本研究では分析に用いないため報告は割愛する。

調査全体の所要時間はおよそ20分であった。

測度

友人関係の単一 - 多重送信性

友人関係の単一送信性と多重送信性をそれぞれ測定するため、長沼・落合（1998）と大谷（1995a）を参考に尺度を作成した。単一送信性については、大谷（1995a）の1項目と長沼・落合（1998）の「友達とのつきあい方に関する尺度」の下位尺度「目的に応じて相手を変えるつきあい方」から選出した4項目を用いた（e.g., それぞれの場合に応じていろいろな友人と付き合うことが多い）。多重送信性については、大谷（1995a）の1項目と概念定義に基づき独自に作成した4項目を用いた（e.g., たいていの場合、同じ友人と行動を共にすることが多い）。それぞれの項目について、7件法（1. まったくあてはまらない ~ 7. 非常にあてはまる）で回答してもらった（計10項目）。

主観的幸福感

心理的適応の指標として、主観的幸福感を用いた。主観的幸福感は、肯定的・否定的感情、人生への満足感、領域固有（e.g., 仕事、家族、自己）の満足感を含む包括的な心理的構成概念であり、心理的健康を表す測度と考えられている（Diner, Suh, Lucas & Smith, 1999; 伊藤・相良・池田・川浦, 2003）。対人関係領域だけでなく、より全般的な適応感を測定できるため、これを用いることにした。本研究では、伊藤他（2003）の主観的幸福感尺度から記述を若干変更して選出した5項目に独自に作成した1項目を加えた6項目を用いた（自分の人生は退屈だ [反転項目]；毎日の生活は充実している；将来のことが心配だ [反転項目]；自分の人生には意味がない [反転項目]；自分の人生は面白い；全体的に見て私は幸せだ）。それぞれの項目について、7件法（1. まったくそう感じていない ~ 7. 非常にそう感じている）で回答してもらった。

結果

尺度構成

まず分析に用いる尺度を構成した。友人関係の単一 - 多重送信性を測定した10項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、固有値の減衰状況（固有値 = 3.20, 2.17, 1.01, 0.89・・・）から2因子構造と判断した。いずれの因子にも負荷が低かった1項目を除外して再度因子分析を行い、その結果をTable 1に示した。

Table 1. 友人関係の単一 - 多重送信性尺度の因子負荷行列, 平均値, 標準偏差, 共通性

	I	II	mean	SD	h^2
I 「多重送信性」 $\alpha=.84$					
2. 同じ友人といろいろなことを一緒に行っている	.80	.10	4.76	1.27	.62
4. たいていの場合, 同じ友人と行動を共にすることが多い	.79	.00	4.57	1.32	.62
10. 同じ友人といろいろな場面で一緒に行動している	.74	-.03	4.38	1.23	.56
3. 何をする場合であっても, 一緒に行動する友人は同じである	.70	-.05	3.67	1.34	.51
II 「単一送信性」 $\alpha=.76$					
6. その時その時で, 付き合う友人を変えている	-.05	.81	3.49	1.39	.68
9. 何をしようとするかによって, 付き合う友人を変えている	.02	.71	3.75	1.37	.50
1. その場その場にふさわしい友人と, 一緒にいるようにしている	.12	.57	4.26	1.34	.31
7. それぞれの場合に応じていろいろな友人と付き合うことが多い	-.09	.52	4.31	1.39	.30
5. 遊ぶ友人と勉強する友人を区別している	-.02	.51	2.89	1.43	.36
因子間相関					
	II				
	I		-.25		

削除項目 8. 学校で付き合っている友人と休みの日も一緒にいることが多い

Table 1に示されるように, 第1因子は, 特定の友人と様々な活動を共有していることを示した4項目に強く負荷しており, 友人関係の多重送信性に関する因子と解釈できた。得点が高いほど, 友人関係における多重送信性が強いことを示すように4項目の平均値を算出し, 多重送信性得点とした ($\alpha = .84$)。第2因子は, 活動の種類に応じて付き合う友人を変えていることを示した5項目に強く負荷しており, 友人関係の単一送信性に関する因子と解釈できた。得点が高いほど, 友人関係における単一送信性が強いことを示すように5項目の平均値を算出し, 単一送信性得点とした ($\alpha = .76$)。2つの因子間の相関は-.25であり, 各因子は比較的独立であると判断した。

主観的幸福感を測定した6項目について信頼性分析を行ったところ, 十分な信頼性が認められたため, 得点が高いほど主観的幸福感が高いことを示すように反転項目を修正して6項目の平均値を算出し, 主観的幸福感得点とした ($\alpha = .81$)。

出身地による参加者の群分け

次に, 参加者の出身地によって関西圏内出身者と関西圏外出身者に群分けした。本研究の分析対象となった661名の参加者のうち, 関西圏内出身者は556名 (男性

278名, 女性277名, 不明1名), 関西圏外出身者は102名 (男性41名, 女性61名)であった²⁾。上述のように, 本研究では関西圏外出身者を都市的環境への移動者と位置づけた。なお, 群ごとの性別の比率に偏りは認められなかった ($\chi^2(1) = 3.38, n.s.$)。出身地に関する質問に回答しなかった2名と日本以外の出身であった1名のデータは, 以下の分析では除外した。

予備的分析

関西圏内出身者と関西圏外出身者で友人関係の多重送信性, 単一送信性, そして主観的幸福感に差が認められるかを確認した。各群の平均値と標準偏差をTable 2に示した。

Table 2. 各変数の群別の平均値と標準偏差

	関西圏内出身者		関西圏外出身者	
	Mean	SD	Mean	SD
友人関係の多重送信性	4.34	1.05	4.41	1.13
友人関係の単一送信性	3.78	0.96	3.55	1.03
主観的幸福感	4.72	1.04	4.56	1.15

Note: いずれの変数も中点は4である

その結果、友人関係の単一送信性について有意差が認められ ($t(653) = 2.28, p < .05$)、関西圏外出身者よりも関西圏内出身者のほうが、友人関係において単一送信性が強かった。友人関係の多重送信性と主観的幸福感については、両群で差は認められなかった（それぞれ、 $t(654) = -0.56, n.s.$; $t(646) = 1.38, n.s.$ ）。

次に、予測の検証に用いる変数間の単純相関を算出した。なお、出身地は、関西圏内出身者を0、関西圏外出身者を1とするダミー変数とした。その結果をTable 3に示した。

Table3. 各変数間の単純相関

	1	2	3	4
1.出身地(0=関西圏内; 1=関西圏外)	1			
2.多重送信性	.02	1		
3.単一送信性	-.09*	-.20***	1	
4.主観的幸福感	-.05	-.04	-.03	1

* $p < .05$ *** $p < .001$

Table 3に示されるように、これまでの分析と同様、出身地と単一送信性、多重送信性と単一送信性の間に有意な相関が認められた。一方、主観的幸福感と他の変数の間の単純相関はいずれも有意でなかった。

予測の検証

予測を検証するため、主観的幸福感を目的変数、ダミー変数とした出身地（関西圏内=0、関西圏外=1）、多重送信性、単一送信性をStep 1、各変数間の2要因の交互作用をStep 2、3要因の交互作用をStep 3で投入する階層的重回帰分析を行った。多重共線性を避けるため、分析の際には各説明変数をそれぞれの平均値により中心化した。結果をTable 4に示した。

Table4. 各ステップにおける標準偏回帰係数
(目的変数=主観的幸福感)

	Step1	Step2	Step3
出身地(0=関西圏内; 1=関西圏外)	-.06	-.05	-.06
多重送信性	.04	.02	.01
単一送信性	-.02	-.02	-.03
出身地×多重送信性		-.07 [†]	-.11*
出身地×単一送信性		.04	.04
単一送信性×多重送信性		-.10*	-.09*
出身地×多重送信性×単一送信性			-.09*
調整済みR ²	.00	.01 [†]	.02*
ΔR ²		.01*	.01*

[†] $p < .10$ * $p < .05$

Table 4に示されるように、モデルの説明力は低いが、Step 3において重回帰モデルが有意となった ($F(7, 638) = 2.39, p < .05$)。それぞれの効果を見ると、Step 3におい

て、出身地×多重送信性、多重送信性×単一送信性の2要因交互作用、そして出身地×多重送信性×単一送信性の3要因の交互作用が有意であった。

3要因の交互作用について下位検定を行うため、まず出身地別に多重送信性×単一送信性の2要因交互作用を検定した。その結果、関西圏外出身者において2要因交互作用は有意であったが ($\beta = -.18, p < .01$)、関西圏内出身者では有意でなかった ($\beta = -.01, n.s.$)。そこで、関西圏外出身者における2要因交互作用の下位検定を行うため、多重送信性の±1SDにおける単一送信性の単純傾斜効果、および、単一送信性の±1SDにおける多重送信性の単純傾斜効果をそれぞれ検定した。結果をFigure 1とFigure 2に示した。

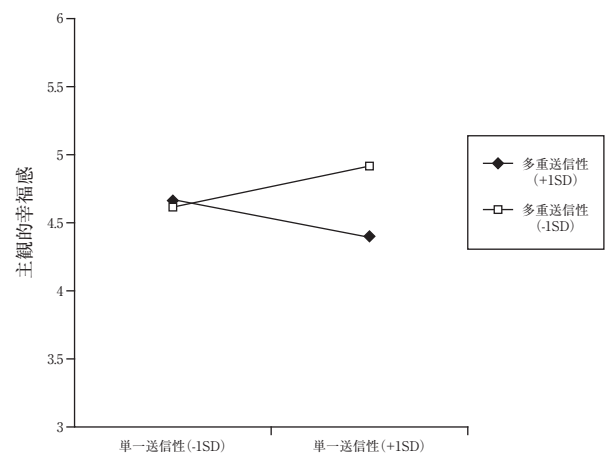


Figure1. 多重送信性の±1SDにおける単一送信性の単純傾斜効果(関西圏外出身者)

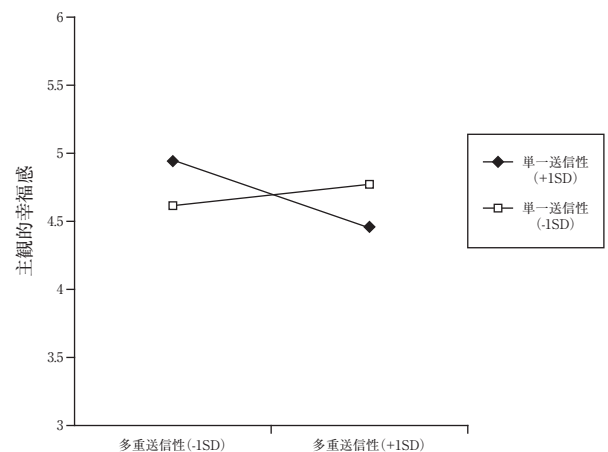


Figure2. 単一送信性の±1SDにおける多重送信性の単純傾斜効果(関西圏外出身者)

Figure 1に示されるように、関西圏外出身者において、多重送信性が弱い場合 (-1SD)、単一送信性が強いほど主観的幸福感が高かった ($\beta = .14, p < .05$)。一方、多重送信性が強い場合 (+1SD)、単一送信性が強いほど主観的幸福感が低下する傾向にあった ($\beta = -.13, p < .10$)。

また、Figure 2に示されるように、関西圏外出身者において、単一送信性が強い場合 (+*ISD*)、多重送信性が弱いほど主観的幸福感が高かった ($\beta = -.24, p < .01$)。一方、単一送信性が弱い場合 (-*ISD*)、多重送信性の影響は認められなかった ($\beta = .06, n.s.$)。

以上から、関西圏外出身者については、友人関係の単一送信性が強く、かつ、多重送信性が弱い人ほど、主観的幸福感が高いこと、関西圏内出身者については、友人関係の単一 - 多重送信性による主観的幸福感の違いが認められないことが示された。したがって、予測1は支持されず、予測2は友人関係の多重送信性が弱いという条件のもとで支持された。

考察

都市的環境の1つの特徴は、多くの移動者を外部から引き寄せることにある (Fischer, 1976 松本・前田訳, 1996)。豊富で多様な施設やサービス、またそれによって生まれる職業機会を求めて、多くの人が、慣れ親しんだ故郷を離れて都市的環境に移動してくる。しかし、新たな環境への移動によって、これまでに構築した対人ネットワークから離れなければならなくなる (Watt & Badger, 2009)。そしてこのような分離は、常に他者と安定した肯定的関係を構築・維持しようとする人間の所属欲求を脅かし、心理的不適応につながる (Baumeister & Leary, 1995)。したがって、新たな環境への移動に伴う心理的不適応は、都市が潜在的に内包する問題の1つといえるだろう。本研究では、この問題の解決に向けた示唆を得るため、所属欲求の進化的背景にある他者との関係性を通じた資源獲得 (Baumeister & Leary, 1995) という観点から、都市的環境への移動者が新たな環境でどのような友人関係を形成することが心理的適応につながるのかを検討した。

関西圏の都市部の大学に通う大学生を対象にした質問紙調査の結果から、関西圏外の出身者において、友人関係の単一送信性が強く、かつ、多重送信性が弱い人ほど、心理的幸福感が高いことが明らかとなった。調査を行った大学の通学圏を考えると、関西圏外の出身者は、その時期については本研究のデータからは判別できないが、少なくとも大学入学までに現在の環境に移動してきた者である可能性が高い。そのため、この結果は、都市的環境への移動者にとって、役割や活動に応じて異なる友人と選択的に付き合い、特定の友人と様々な役割や活動を共有しないようにすることが、心理的適応を高めることを示唆している。

ではなぜ、都市的環境への移動者において、多重送信的な友人関係ではなく単一送信的な友人関係を形成する

ことが心理的適応につながったのだろうか。そこには、都市という社会環境の性質とそれが規定する適応的な対人関係方略が関わっていると考えられる。都市的環境には、多様で豊富な友人関係の選択肢が存在する (e.g., Fischer, 1976 松本・前田訳, 1996)。そのような環境においては、特定の友人と様々な役割・活動を共有するよりも、役割や活動に応じて異なる友人と選択的に付き合い合うほうが、自己にとってより有用な資源を獲得できるだろう (宮崎・金見, 2007)。なぜなら、特定の役割や活動におけるそれぞれの友人の専門性が高くなり、相対的に質の高い資源を獲得できる可能性が高まるからである。そのため、都市的環境においては、多重送信的な友人関係よりも、単一送信的な友人関係のほうが適応的な対人関係方略となる (宮崎・金見, 2007)。

このような対人関係方略を用いることは、特に、都市的環境への移動者の心理的適応にとって重要になるだろう。都市的環境への移動者は、それまでの資源提供源であった友人ネットワークを離れたため、新たな環境でその代替関係を再形成することが個人の適応上必須の課題となっている。そのため、新たな環境で、その環境の要請に合致した友人関係 (ie., 単一送信的な友人関係) を築き、それを通じて有用性の高い資源を獲得することは、移動によって生じた問題を解消し、個人の心理的適応全般を高めることにつながったと考えられる。一方、都市圏あるいは都市への通学・通勤圏内にもともと居住している人にとって、既存の友人ネットワークは維持されているため、関係性を通じた資源獲得に関する問題は意識化されにくく、その結果、友人関係の単一 - 多重送信性が心理的適応に影響しにくかったと考えられる。

ところで、本研究では予想外の結果として、都市的環境への移動者において、友人関係の多重送信性が強い場合、単一送信性が強いほど主観的幸福感が低いという傾向が認められた。これは、単一送信的な関係を形成することが都市的環境への移動者の心理的適応を一様に高めるわけではないことを示唆している。このような結果が得られた1つの原因として、2つの対人傾向が互いに干渉しあうことで不適応が生じた可能性が挙げられる。例えば、以前の居住環境では多重送信的な関係が適応的な対人関係方略であった人が、都市的環境に移動することで単一送信的な関係を築く必要性が強まった結果、以前の対人関係方略と現在の方略が干渉しあって、友人関係をうまく築くことができず、心理的不適応を引き起こした可能性が考えられる。

これまでの先行研究から、地理的移動に伴う心理的不適応を解消するうえで、既存の友人ネットワークを代替する人間関係を形成することの重要性は既に指摘されている (Watt & Badger, 2009)。本研究は、都市的環境の性質を鑑み、特にその環境において移動者の心理的適

応につながる具体的な友人関係の形態を明らかにしたという点で、大いに意義があるといえる。また、都市が内包する問題に取り組む際の新たな視点を提供するものであったといえるだろう。

ただし、本研究にはいくつか限界があり、今後検討すべき課題も残されている。最後にそれらについて言及する。

本研究の限界として、都市的環境への移動者の分類方法の曖昧さが挙げられる。本研究では、調査を行った大学の立地条件から、関西圏外の出身者と関西圏内の出身者をそれぞれ移動者と非移動者に分類した。しかし、現在の環境に移動した時期を測定していないため、移動者と分類された関西圏外出身者の中には、大学入学時に居住地を移動し、新たな友人ネットワークの構築を強く希求している人、移動してからの期間が長く、現在の環境で既に友人ネットワークを形成している人などが混在している可能性がある。そのような場合は、関西圏外出身者において、上述したような既存の対人ネットワークからの分離に伴う新たな関係形成の重要性が相対的に低下し、友人関係の単一・多重送信性が心理的適応にもたらす効果が検出されにくくなるよう作用すると考えられる。しかし、予測を検証する際に、本来認められないはずの効果が認められる可能性は少ないと考える。もちろん、今後の研究では、現在の居住環境への移動時期も測定し、その影響を同時に検討する必要がある。新たな環境での代替関係形成の重要性を考えると、都市的環境への移動者において友人関係の単一・多重送信性が心理的適応に及ぼす影響は、移動してからの期間が短い人に顕著に表れると予想されるからである。

また、本研究では友人関係の単一・多重送信性が心理的適応に及ぼす影響を検討したが、当然のことながら、友人関係の形態のみが移動者の心理的適応を規定するわけではない。これは、階層的重回帰分析においてモデルの説明力が低かった1つの原因となっていると考えられる。今後の研究では、心理的適応に影響する他の要因（e.g. パーソナリティ、大学生活への適応、対人関係の質）を統制したうえで、友人関係の単一・多重送信性の影響がどの程度認められるかを明らかにする必要があるだろう。

以上のような限界と課題を有しながらも、本研究の知見は、都市的環境への移動者の心理的適応がどのように維持されるのかという問いに対して一定の回答を与えるものといえるだろう。つまり、その心理的適応を維持する1つの手段として、多重送信的な友人関係ではなく、単一送信的な友人関係を築くことが有効であることが示唆されたといえる。

【引用文献】

Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation.

- Psychological Bulletin*, 117, 497-529.
- Cacioppo, J. T., & Patrick, W. (2008). *Loneliness: Human nature and the need for social connection*. New York: W. W. Norton & Company.
- Diner, E., Suh, E. M., Lucas, R. E., & Smith, H. L. (1999). Subjective well-being: Three decades of progress. *Psychological Bulletin*, 125, 276-302.
- Fischer, C. S. (1976). *The urban experience*. New York: Harcourt Brace Jovanovich. (松本康・前田尚子 (訳) 1996 都市的体験－都市生活の社会心理学－ 未来社)
- Fischer, C. S. (1982). *To dwell among friends: Personal networks in town and city*. Chicago, IL: The University of Chicago Press. (松本康・前田尚子 (訳) 2002 友人のあいだで暮らす－北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク－ 未来社)
- Fisher, S., & Hood, B. (1987). The stress of the transition to university: A longitudinal study of psychological disturbance, absent-mindedness and vulnerability to homesickness. *British Journal of Psychology*, 78, 425-441.
- Fisher, S., & Hood, B. (1988). Vulnerability factors in the transition to university: Self-reported mobility history and sex differences as factors in psychological disturbance. *British Journal of Psychology*, 79, 309-330.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 74, 276-281.
- 松本康 (2005). 都市度と友人関係－大都市における社会的ネットワークの構造化－ 社会学評論, 56, 147-163.
- 宮崎弦太・金児暁嗣 (2007). 居住環境の都鄙性と対人関係の様態－資源獲得方略としての友人関係の分析－ 都市文化研究, 9, 2-19.
- 長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友人とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47.
- 大谷信介 (1995a). 現代都市住民のパーソナル・ネットワーク－北米都市理論の日本的解説－ ミネルヴァ書房
- 大谷信介 (1995b). <都市的状况>と友人ネットワーク－大都市大学生と地方都市大学生の比較研究 松本康 (編著) 増殖するパーソナルネットワーク (pp.131-173) 勁草書房
- 大谷信介 (2008). <都市的なるもの>の社会学 ミネルヴァ書房
- Strobe, M., Van Vliet, T., Hewstone, M., & Willis, H. (2002). Homesickness among students in two cultures: Antecedents and consequences. *British Journal of Psychology*, 93, 147-168.
- Van Tilburg, M. A. L., Vingerhoets, J. J. M., & Van Heck, G. L. (1996). Homesickness: A review of the literature. *Psychological Medicine*, 26, 899-912.
- Van Tilburg, M. A. L., Vingerhoets, J. J. M., & Van Heck, G. L., & Kirschbaum, C. (1999). Homesickness, mood and self-reported health. *Stress Medicine*, 15, 189-196.
- Watt, S. E., & Badger, A. J. (2009). Effects of social belonging on homesickness: An application of the belongingness hypothesis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 35, 516-530.
- 山岸俊男 (1998). 信頼の構造：こころと社会の進化ゲーム 東京大学出版

【脚注】

1. 本研究で分析したデータの一部は、日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会合同大会で発表したデータと重複している。
2. 関西圏外出身者の出身都道府県の内訳は次のとおりである。静岡県11名、広島県10名、三重県9名、愛知県7名、岡山県7名、愛媛県6名、徳島県6名、福井県5名、岐阜県4名、高知県4名、香川県3名、鹿児島県3名、鳥取県3名、島根県3名、東京都3名、福岡県3名、山口県2名、神奈川県2名、石川県2名、千葉県2名、大分県2名、岩手県1名、宮崎県1名、埼玉県1名、富山県1名、北海道1名。

The effect of uniplexity and multiplexity of friendships on adjustment to urban environments:

The case of undergraduate students in urban areas.

Genta MIYAZAKI, Takuya TABATA, Tomoko IKEGAMI

The purpose of this study is to explore what type of friendship will improve psychological adjustment among those who have moved to urban environments. On the basis of the belongingness hypothesis and urban sociology literature, we predicted that in urban environments, relocatees from outside who developed uniplex rather than multiplex friendships would gain more useful resources from their friends, leading to better psychological well-being. A questionnaire study was conducted with 675 undergraduate students who were attending universities in urban areas of the Kansai region. Participants were classified into relocatees or non-relocatees by their home regions. In the questionnaire participants rated the uniplexity and multiplexity of their friendships and the degree of subjective well-being. Consistent with our prediction, results revealed that those who developed more uniplex friendships showed a higher level of subjective well-being, and this relationship appeared among relocatees but not among non-relocatees. These results suggest that forming uniplex friendships is particularly important for those who have moved to urban areas in adjusting to their new environments.

Keywords : urban environment, psychological adjustment, uniplex relationships, multiplex relationships, relocatees